

伊藤伊那男さんを悼む



「銀漢亭」のカウンターに立つ
伊藤伊那男さん＝2019年4月

一期一会に感謝した俳人

〈みすずかる銀漢は大き童謡
伊藤伊那男〉（「然々」とよ
り）

伊那男さんと初めて会ったのは、東京・神保町の居酒屋「銀漢亭」。主人の伊那男さんは、その俳号から同郷の方ではないと信じ、在住の米国ニューヨーク市から伊那郡箕輪町に帰郷中の2010年6月、電車を乗り継いで訪ねたのだ。はたして優しい笑顔で穏やかに話す伊那男さんは駒ヶ根市のご出身であり、さらに伊那北高等学校の先輩に当たることがわかった。

〈胡瓜揉む欲得の世の隅に
て〉（「然々」とよ）

伊那男さんは慶応大卒業後大手証券会社に勤務、その後、7月に設立した金融会社の倒産を経験した。2年後の03年、料理の腕を生かして53歳で「銀漢亭」を開業。17年間、看板を守り抜いた。俳句は33歳から始め、俳句結社「春耕」に入会。49歳で上梓した第二句集「銀漢」で第2回俳句協会新人賞を受賞。11年に俳句誌「銀漢」を創刊、19年に第三句集「然々」とで第5回俳句協会賞を受賞している。

〈井月の暮とからも雪解風〉

（「銀漢亭」ほれ囃しより）

伊那男を漂泊した俳人、井上井月（1822～87年）を世に出した下島空谷と郷里を同じくする伊那男さんは、2014年の著書「漂泊の俳人 井上井月」にて井月の人生と作品の魅力を生分にたっぷり上げた。また、長年にわたり、井月の名を冠した俳句大会の実行委員長を務め、井月の知名度の向上に大きく貢献した。伊那男さんにとって最後となった「第24回信州伊那井上井句大会」（昨年9月）の大盛況は記憶に新しい。

〈筆と筆ふだめのまなぶな
日向〉（「知名なほ」より）

〈或るときは家族の数の福寿草〉
（「然々」とよ）

私生活では、初任地の京都支店で出会い、一見をもち、30年余り連れ添った妻米代さんを、06年にがんをこす（享年55）。その後、多くの孫に恵まれ、晩年は長女の家族と暮らしていた。

「銀漢亭」閉店後は、俳句や旅を堪能しながら充実した日々を送っていたが、23年、74歳の秋に胆管がんを葬。本業の後、療養を続けながら、昨年7月7日、76歳の誕生日に俳

句を果たしたが、第四句集「狐囃し」だ。

「『狐囃し』とは井月の句で知った言葉で『思いがけぬ葉襦』を悼す。思えば私の人生は狐囃しであつた」と、あどがきで題名の由来を語っている。

〈生きとある証海風を囃み切るも〉〈冬暮に此岸を撫む力かな〉〈早草が粘り楳鉢と廻る〉〈ふるさとく夜露を厚く着て帰る〉〈初夢の妻は長生きなぞを託す〉（全「狐囃し」より）

確かに学生に基づいた作品の味わいは、自然談においても生活談においても、豊かな感情から鮮やかな情緒まで幅広い。どの句からも作者の心が読み、読む者の心も打つ。

帯文にある「俳句は自然と神仏人に対して、感謝と祈りを捧げた言葉である」という伊那男さんの思いを旨にしたとき、ある句座で伊那男さんがこう語ったことを思い出した。

「芭蕉の奥の細道で、季たちは、ただの一度行き会って一回限りの句会を持つ。もうこれしかない覚悟で句会に臨む。あらゆる句会は一期一会だと思ふ。」

伊那男さんは、句会のみならず、人生の中で訪れたあらゆる出来事や人との出会いを、一期一会と心得て、感謝の心で受け入れていたのだと思う。その一こととして接がった、俳句と伊那男さんとの縁は、この狐囃しに深く感謝しつつ、心より冥福を祈り申し上げる。

（俳人）

◆ ◆
伊藤伊那男さんは昨年11月14日死去、76歳。